

言者ムハンマド (1/12): 言者ムハンマド以前のアラビア半島の状

5.0

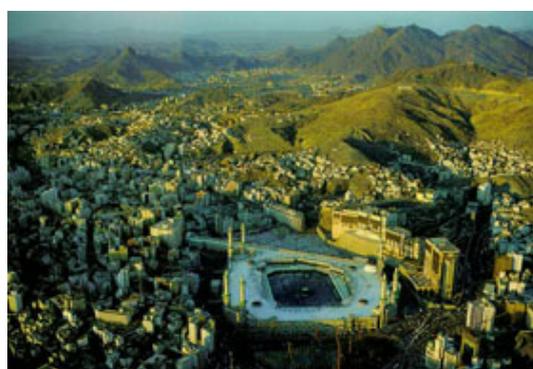
明: この 事の 明: 言者ムハンマド 生以前のアラビア半 における社会的 そして政治的状 の概 。

目: [事 言者ムハンマド彼の](#)

より: IslamReligion.com

ED6 Dec 2009

集日 19 Oct 2020



当 のアラビア半 には3つの影 力が存在していました。北部では（キリスト教の） ロ マ帝国と（ゾロアスタ 教の）ササン朝ペルシャの二大帝国が え ない 争に明け暮れつつも力の均衡を保っており、北部のアラブ人たちは にはこちら、また にはそちら、という に 流的な盟 を びつつ、分裂して暮らしていました。

一方南部では、その乳香と没 の芳香によってロ マ人たちに ‘幸福のアラビア’ と呼ばれていた土地（主に 在のイエメンとサウジアラビア南部）が がり、その は非常に魅力的でした。エチオピアの 治者ネグスによるキリスト教への改宗は、彼の国と ロ マ帝国との同盟をもたらしました。6世 初 にエチオピア人がこの肥沃な地の所有 を手に入れたのも、 ロ マ帝国による承 によるものです。南部の人々は 情な征服者による没落以前、アラビア半 中部の砂漠地 を 商 易によって 拓しており、 商のガイドと オアシスにおける交易所の の役目を果たしていたベドウィンたちの生活に秩序をもたらしていたのです

。

これらの人々の象が乳香の木であれば、乾燥地のそれはナツメヤシの木でした。一方の手には品の香料があり、そしてもう一方の手には最低限必要な食料があっただけだったのです。南部のある人が「の歌声はこえず、草木が茂ることもない」とんだように、ヒジャズ地方（アラビア半西部）に魅力的な源があるとは、一人として思いもしなかったことでした。こういった理由からヒジャズの部族は侵略や征服をしたことがなく、彼らはかを「ご主人さま」と呼ぶよういられたこともありませんでした。

しさは彼らの保者でしたが、彼らは自分たちをしいとは感じなかったでしょう。しさをを感じるには裕福な者への嫉が必要ですが、彼らはをも嫉しませんでした。彼らの裕福さは自由、名誉、高な祖先、そして彼らが唯一知っていた芸であるの中にあっただけです。私たちが在口にする「文化」とは、全てこの媒体に凝されてきました。彼らは勇や自由を美し、友を称えを嘲り、部族仲の勇敢さと女性の美しさをし、それらは焚き火の、あるいは永にくかのようない砂漠と青い空の下で唱され、地上における不毛の地を永に旅する人々の大さを言していたのです。

ベドウィンたちにとって、言はと同じようなさを持っていました。にある二つの部族がにおいて峙するは通常、双方が最もれた人を出して先に立たせ、自の勇敢さと崇高さを称え、を中させるのです。そして最もれた士同士の一打ちが主要であるこのようないは、私たちが今日理解するというよりも、名誉を得するための技のようなものでした。どんちゃんぎや自画自、ひけらかしなどの要素も加わり、近代的争よりもずっと犠牲者は少なくてんだのです。それは利品の分配による著しい果をもたらす役目も果たしました。また者が位性を示すことは、名誉の概念に反することでもありました。一方がをめると、双方の死者が数えられ、利した部族は事上の金をした部族に支することによって部族の相的な力は健康的なバランスを保っていたのです。こういった式と、文明化された争の差には目をるものがあります。

しかしながらその当のマッカは全くの理由による重要性を持っており、それは在も尚わらずいています。そこには人が唯一の神を崇めるために立された最初の家であるカ

。更には女 し、新生女 の生き埋めは当 の一般的な 行だったのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/181>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。